

3(2)第4回 子育て親育ちフォーラム・地域大学間連携シンポジウム

[1]第4回 子育て親育ちフォーラム

「地域のNPO・幼稚園教員と子どもの健全な育ちを考える」(担当：美作大学)

敬称略

進行・松村納央子：ただいまより、第4回「子育て親育ちフォーラム・地域大学間連携シンポジウム」を開催いたします。進行を務めさせていただきます松村納央子と申します。よろしく願いいたします。フォーラム開催にあたり、本学学長・目瀬守男より皆様にご挨拶申し上げます。

目瀬守男：紹介いただきました、学長の目瀬でございます。本日は、ようこそ本学にお出でいただきまして、ありがとうございます。今日は、文部科学省の教員養成GPの取り組みであります、子育て親育ちフォーラム・地域大学間連携シンポジウムの第4回目をこれから開催されるということでございまして、大変おめでとうございます。各地から多数の皆様方にお越しいただきまして、大変ありがたく、今日のご成功を願っております。最初に、子育て親育ちフォーラムがこれから始まりますが、まずは地域の人的支援です。子育てにどう関わってもらうかという、地域作りにとっては大変重要な課題でございます。それから2番目は、蛭田先生の基調講演として、「こころの呼吸ということ」という題名で、お話を伺うことになっております。3番目には、「表現」をキーワードとした地域大学間連携シンポジウム。これは、特に保育の関係で非常に重要な課題でございます。これらがディスカッションされていくということです。この第4回のフォーラム・シンポジウムが成功されますことを心より願いまして、簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。《拍手》

進行・松村納央子：それでは午前の部、子育て親育ちフォーラムに移りたいと思います。テーマは、「地域のNPO・幼稚園教員と子どもの健全な育ちを考える」です。子どもの健やかな育ちが危ぶまれる昨今、地域の果たす子育て、親育ちの役割を語り合いたいと存じます。特に昨今は、児童虐待や、熊本県の「コウノトリのゆりかご」、あるいは偏った子育ての見方から生じる幼稚園への過大な要求、あるいはまた、育児不安を抱える保護者の増大など、保護者の役割を再認識させるような事件が多数報道されるようになりました。保護者の方が、それぞれ悩みやもどかしさを抱えていることが窺えます。その手助けとして、地域の中でどのようなことができるか考えるよい機会になれば幸いです。会の進行としましては、まず3名のパネリストより、それぞれの立場から親育ちへの眼差しをご提案いただきます。

ここで、パネリストの方の紹介に移らせていただきます。まず、初めに提案いただきます市場恵子さん。市場さんは、岡山市男女共同参画社会推進センターで専門相談をなさったり、大学や看護学校で非常勤講師を勤められたりして、社会心理学の領域でご活躍です。子育て中の母親の立場に立った、心に寄り添う相談と定評のある先生と伺っております。

続いて提案いただきます藤田浩子さん。藤田さんは幼児教育に関わって50年。ここ20年は子育てサークル「風の子」グループを組織され、全国各地で若いお母さん達に童歌や

遊びを伝えたり、子育て講演会などをしていらっしゃる。藤田さんの本を手にとられたことのある方も、会場にいらっしゃるのではないのでしょうか。

3番目に提案いただく方は、歌房靖夫さんです。歌房さんは、NPO「阿波(あば)たんけん・はっけん・ほっとけん」の事務局代表をお務めです。県北の過疎地域から、子どもと地域とをつなぐ橋渡しとなる実践を多数展開されていると伺います。

なお、本日のフォーラムの司会は、本学短期大学部教授・松岡信義でございます。それでは、松岡先生、よろしくお願いいたします。

司会・松岡信義：おはようございます。早くからたくさんの方にご来場いただきまして、ありがとうございます。このフォーラムは、先程の学長の挨拶にもありましたように、文部科学省の教員養成GPの取り組みです。GPという言葉は初めて聞かれる方もいらっしゃるかもしれませんが、Good Practice、よい実践ということですね。岡山大学を拠点とする事業が採択されたもので、今回の子育て親育ちフォーラムは連続フォーラムの第4回目ということ。申請時のテーマは「地域のNPO・幼稚園教員と子どもの



の健全な育ちを考える」です。今日はもちろんそういったものに関わりますけれども、特に「親育ち」ということにスポットを当てた論議になると思います。先程進行の松村さんからもありましたけれども、たくさん問題があります。そういった中で親が、とても当たり前のことですが、大きな役割を示さなくてはならない。しかしそれがどうもおかしいのではないかと、という問題意識が裏にある課題の設定の仕方です。タイトルとパネリストの関係で申しますと、先程紹介にありましたように、藤田さんは、長年幼児教育と関わりながら実践をされていると伺いますし、それから市場さんもずっと、岡山県のみならず日本を代表するNPOの活動、CAP、子どもに対する虐待防止という団体のリーダーでもいらしていました。そういった意味でタイトルに関わっても、それらは十分満たされているということです。その中でも特に「親育ち」ということです。

それでは、さっそく論議に入っていきたいと思いますが、最初に進め方について若干ご説明を申し上げます。ここに3名のパネリストの方がいらっしゃいますけれども、最初に一言ずつ語っていただきます。よくあることですが、フォーラムやシンポジウムに行った場合、最初に何人ものパネリストやシンポジストが20～30分ずつ続けてしゃべって、聞く方はもう初めの段階で疲れ果てたということも結構あります。ですが、今回はとにかく1つの論点で意見をいろいろと取り交わします。会場の方からも積極的にご意見をいただき、会場全体で問題を考えていこうと思っています。そのため、最初の発言は非常に切り詰めた形でやっていただくことにします。「私は今日、こういう観点でこういう内容を話すのだ」ということを最初に簡単にお話しいただく。それを受けて、後の論議に回したいと考えております。その後、それを引き継いだ形になりますけれども、会場からもご質問やご意見を出していただき、出された問題をみんなで共有していくという形にしたいと思います。そして最後に、再び3名の方に今日の論議全体を通じ、提言といった形で、一言ずついただく。このような形で進めて参りたいと思います。では、市場さんからよろしくお願いいたします。

市場恵子：はじめまして。市場です。先ほどご紹介いただきましたように、大学や看護学校で社会心理学、人間関係論、ジェンダーなどを教える傍ら、DV・セクハラの子供支援に携わっています。個人的には4人の子どもの親、2人の孫の祖母でもあり、孫達から「ばあば」と呼ばれています。



冒頭、子どもにいろいろな問題が現れていて、それは親の抱えている問題でもあるというご指摘がありました。子どもの育つ土壌である私達大人の有り様が、今の子どもに反映していると思います。「問題児」「問題親」というより、困難な状況を抱え、サポートを必要としている子どもや親がいるということを実感しています。

「子育てが楽しい」と感じている親もいますが、「子育てが辛い」と感じている親もいます。子育てを辛いと感じる親の多くが、次のような状況を抱えていると考えられます。

1つ目は、子育て以外に自分のやりたいことができない。私自身も20代の初めに専業主婦の状況を生きていた時期があり、閉塞感を味わいました。朝から晩まで子どもに縛られていると、自分を見失ってしまいます。しかし、趣味や活動、仕事があれば、別の世界から子どもを見つめ直したり、気分を転換できます。親が個人として認められる場所や、多様な選択肢を提供していく必要を感じます。

2つ目は、夫の育児責任放棄。父親が子どもに関わらない、妻の話を聞かない、子育ての悩みを一緒に考えてくれない。お父さんも長時間労働で疲れ果てているのかもしれない。「子育てしない男性は父と呼ばない」というコピーがありましたが、子育てから逃げている父親は親として育つことができません。男性を仕事に縛り付けている社会や働き方を問い直し、伝統的な性別役割意識を変えていく必要があります。これは、政治の問題でもあり、大人社会全体の価値転換が求められていると思います。

3つ目は、孤立。友だちや親族など、悩みを聞いてもらったり、助けてもらえる人がいれば、子育てを楽しんだり感じたり、子どもを可愛いと思えるような余裕も生まれます。しかし、話し相手も相談相手もない場合は、不安を抱え込まざるを得ません。転勤などで知人も友人もない土地に引越し、孤独な子育てをしている親も多いでしょう。近くに、子育て支援センターや、仲間作りをサポートしてくれる親子サークルがあれば、親も子どもつながっていくことができますね。

4つ目は重圧。子どもに何か問題があれば、すぐに親を責める世間があります。さらに、身近な夫や親族からも「あなたが悪い」と責められれば、母親はますます自信を失ってしまいます。「Nobody's Perfect」という子育て支援のプログラムがあります。誰もが完璧ではないのですから、「生きてりゃいいさ」くらいの鷹揚な考え方が必要です。親自身がパーフェクトを期待されると、親が子どもにもパーフェクトを要求するようになり、子どものちょっとした失敗、例えばお茶をこぼしたという行動すら許せなかったり、他の子と比べて言葉が遅い、オムツが取れないなどの理由で、イライラしたり、子どもの成長にゆっくりつきあうことができないという状況が生まれてくるのだと思います。

また後でお話しする機会が与えられるので、私の発題はこれくらいにしておきます。どうもありがとうございました。《拍手》

藤田浩子：藤田浩子です。私は「風の子」という子育てサークルを始めた理由を3つ申し上げようと思います。

1番目は、昔は、大家族の中で子どもを育てました。家族の中に子どもを育てる力があつたのですね。例えば次男・三男で核家族と似ているような家族構成でも、親戚付き合いが多かった。家族主義ですから、姑さんがいろいろな意味で口を出してきて、お嫁さんにとっては嫌なこともあったでしょうけども、いろいろ助けてくれました。つまり1番目は、家族に子どもを育てる力があつたということです。



2番目に、地域にも子どもを育てる力がありました。例えば、母親が少し甘くても、周りには厳しい目で見えてくれる人がいました。そして、自然が周りにたくさんありますと、自然も1つの地域の力となって子どもにいい影響を与えていたと思います。ですから、地域に力があつたということですね。

それから、3番目は、家族がたくさんいました。私の母親は7人子どもを産みまし、同級生の中には、14番目に生まれたから「としこ」さん、男性だけで8番目だから「八郎」さんという名前の人がありました。それから「琴女」と書いて「ことめ」さんという、ユニークな名前の人もありました。琴の女ですから美しい名前だと思っていたら、本当は「子」「止め」という親の希望だったのでした。それくらい子どもがたくさんいたわけです。ですから、上の方は弟妹の面倒を見たり、下の方は兄姉の子を子守りしてきました。面倒を見ないまでも、周り中で子育てをしていましたから、他人の子育てを見ながら育ってきたわけです。ところが今、生まれて初めて赤ん坊を抱く経験が自分の赤ちゃんという人が8割もいます。そうすると、どうやって育てていいかわからない。よく、動物がジャングルから連れてこられて、動物園の中に1組カップルで入れられて赤ん坊を産んでも、どうやって育てていいかわからないという話がありますが、少しそれに似てきています。自分の種族、つまり日本人の子育てを見ないまま、自分が突然母親あるいは父親になってしまった中で、戸惑っている。その中で、先程市場さんがおっしゃった密室育児のようなことになり、母親だけに責任が被さってくると、とても辛いだろうと思います。

そういう、昔はあつた家族の力、地域の力、周りの子育てを見ながら育ってきたという力を、どうすれば今風に再現できるかというのが「風の子」です。そのことについては、また後程お話しさせていただきます。ありがとうございました。《拍手》

歌房靖夫：歌房靖夫といます。3年前に、「吉井川源流の碑」という活動をしました。小学校4年生の総合学習ということで行いました。子ども達に川を見せてやろうという活動です。皆さんのところにも川は流れているでしょうし、津山では吉井川が流れているわけですが、実際には、どこから始まってどこに流れているか、全体を見た方は、この中でも少ないのではないかと思います。私もそうでした。そういう形で、子ども達の「この川はどこへ流れていくんだろう」「どこから流れてくるの」とい



う疑問に答えてやろうということで行ったのが、この「吉井川源流の碑」という阿波(あば)の取り組みであります。百聞は一見に如かずということで、写真を見ていただけたらと思います。

「吉井川源流の碑」とは、吉井川の川の始まり、源流から原木を切り出し、下流の西大寺から源流までリレー方式で引き継ぎ、源流に建立するものであります。ねらいは、川とのふれあいを通じて、川の大切さを体感し、川をきれいにする活動につながればということです。流域の皆さんが、碑でリレーしていくのです。今回はリヤカーで行ったのですが、川だけでなく、川で人がつながっているということ、そういうネットワークができたということです。

始めに、どこから原木を切り出すか。阿波の一番高い山ということで、大ヶ山という大きな山があります。これが989メートル。この木が11メートル程度はあると思いますので、「高さ1000メートルのところの木や枝に降った水を皆さんも飲むことになりますよ」というメッセージを込めて、ここで切ろうと決めました。この大ヶ山は面白くて、昔から「鬼が住んでいる」「天狗が住んでいる」「竜が住んでいる」と言われた山なのです。

これは神事を行っているところです。その下は、木が倒れるところを子ども達が見たことがないのではないかと、ぜひ見せたい、ということで切りました。それで運び出しましたが、80人くらい集まりました。木の年輪を数えるとなんと82歳でした。その後、それだけで終わらなくて、すぐ皮むきを子ども達にやってもらいました。

これは、4年生の総合学習でやったのですが、当時4年生が9人おりまして、筆で1人1字ずつ書いてもらいました。そして、その字を木に写して彫るところです。これは親の方がはまってしまいました。それから墨入れ。フラッグも作りました。フラッグには、小天狗のような阿波の子が描かれています。また、阿波は「もえぎの里」と言われておりますので、もえぎ色にリヤカーを塗りました。子ども達が喜んで、ペンキだらけになりました。

そして、「阿波ふるさと祭り」のときに出発式を行いました。6月13日から10月31日にかけて、14市町村を回ったわけです。それで、実際にやりたかったことは、これは合併前だったので、津山市・加茂町・阿波村をつなぎたいということだったのです。子ども達をつなぎたいということでして、津山の清泉小学校、加茂の加茂小学校、阿波小学校の3つの学校の子供達のリレーをして行ったわけです。そして、みんなでリヤカーを引っ張って行きました。20キロ弱ですが、子ども達も意気揚々と引っ張りました。それで、10月31日には阿波に帰る。こういうことです。



冒頭でも言いましたが、「阿波川の源流はどこだろう」ということで、探さなければいけません。そこで、阿波の探検、発見が始まるわけですね。どんどん探して行って、深山、ここだろうということになり、そこに登って行きました。そうしたら、水が湧き出ているところがありました。ここが源流だろうということで、実は、源流はたくさん、至る所にあるのですけれども、「ここを阿波川の源流と定める」と書いた塔を立てたわけです。

次は、「この川はどこに流れていくのだろうか」ということです。西大寺ですけれども、「吉井川フェスタ」という、川を1日海水浴場にするという祭りをやっておりまして、そこに参加しました。他の子ども達は泳いでおりましたが、阿波の子ども達は泳ぎませんでしたね。「泳げ」と言っても泳ぎませんでした。それから、どんな生き物が住んでいるのかということで、その頃の瀬戸町にキリンビールの工場がありまして、吉井川の、私達のところから流れた水でビールが作られているわけです。ここに行って、どういう生き物が住んでいるかなどを見ているところです。

それからシンポジウムの前夜祭。これは親達、特に男性ですけども、イノシシの頭を焼いて振る舞いました。それから、これは学校で先生と子ども達がパワーポイントを作っておりまして、発表を堂々としてしました。シンポジウムでは、私がパネラーになりまして、あと6人。「どうしたら川を守れるだろうか」という提案をしまして、それはいろいろあったのですが、子ども達と一緒に考えたのは、「食べ残し、飲み残しをしない」ということです。

そのあと、式をやったのです。きれいな川の、この裏に吉井川源流の碑を立てました。このときは100人くらい集まりました。これで、「阿波たんけん・はっけん・ほっとけん」ということで終わりです。

川の全体を体験してほしい、体感してほしい、というのが私のねらいでした。それは、みんな分かったのではないかと思います。親も、本当にやって楽しかった。私自身も

そうです。自分の原点を探す、源流を探す。自分探しができました。人生の真ん中で、人生を見つめ直すこともできたのではないかと思います。しかし、一番の収穫は、子ども達を自然の中に連れて行ってやると、遊び出すということなのですね。そのところは、次の提案で紹介できたらと思いますので、よろしくお願いします。以上です。《拍手》

進行・松村納央子：提案された3名の皆様、ありがとうございます。それでは、松岡先生、議論に移っていただきたいと思います。

司会・松岡信義：ありがとうございました。3名から、非常に切り詰めた形ではありますが、ご発言をいただきました。それでは論議に入ります。今、ご提案いただいたことにつ



いて、これから自由に発言していただき、そしてそれをみんなで共有していきたい、そういった大きな流れでやりたいと思います。

まず、今のご発言を聞いておりますと、共通していることがあると思いますね。例えば最初の市場さんの発言ですが、夫の育児放棄や、母親が子育て以外に目が向いていない、もうちょっと他を見る目を持つことができたなら楽なのに、というところから、孤立、重圧ということを話されました。そして、藤田さんも3つ言われました。大家族であった、地域の力があつた、数がたくさんあつた。そして歌房さんの今の映像ですね。実は、前もって先生方のプロフィールのようなものをいただいております、市場さんは社会心理学をされている方ですが、人間関係ということ 키워ドとされています。それから藤田さんは、先程もありました「風の子」の活動も含め、関わりを作っていくことにずっと心を砕いていられています。そして、歌房さんのお話でも、川自体がつながりを象徴していますけども、そこに人がつながるということがありました。言ってみれば、人間関係、関わり、つながり、これらをキーワードにされているように感じました。市場さんの発言で言いますと、孤立するから重圧になるわけですね。そして、藤田さんや歌房さんの場合には、つながりを実践されている姿を発表されたわけですね。歌房さんの阿波(あば)での実践の中では、源流の碑のお父さん達が頑張っている。ああいったところには、育児放棄のお父さんの姿は見えませんよね。そういうことで相互に関わっていて、人間関係、関わり、つながりというキーワードがあるのではないかと思います。

では、最後に見ました映像の印象も新しいところですが、歌房さんにまずお答えいただくことを含めて、3名の方にお話を伺いたしたいと思います。お父さんが夢中になっていましたよね。親が夢中になるということは、親育ち、ひいては子育てにどのような意味を持つのかということです。実践されてきた中で、そのことについて思っていることを語っていただきたいと思います。

歌房靖夫：私も、最初から子育てをやったわけではないのですが、PTAで「役員になってくれ」と頼まれました。ほとんど受ける人はいないのですが、役員の女性に「挨拶だけしてくれればいい。あとは私らがやる。任せておきなさい」と言われてやりました。ただ、私も「とんでもない、PTAはそんなものではない」とちょっと反抗する気持ちがありまして、元々参観日に行くこともなかったのですが、行き始めたのです。そこで、お母さん方に任せていたら大変なことになるな、と思いました。阿波でもやはりいじめがあつて、不登校の子がいます。今の世の中だったら当たり前というところがあるのですが、私はそれを「ほっとけん」という思いもありました。

それともう1つは、やっている面白いわけですね。お母さんだけに任せていたら駄目なのではないか、バランスがとれないのではないかと。私達のできることをやらなければ。問題行動の対処療法だけではなく、子どもに自然を体感させるということが大事なのではないか。五感や第六感を育てるということが大事なのではないか。それは、やはり父親が自然の中に連れ出してやらなければ。阿波でそんな話ですからね、ちょっとびっくりされるかと思うのですが、それをしなければいけないのではないかと感じて、それが始まりです。

司会・松岡信義：市場さん、いかがでしょうか。今のことを聞いて。

市場恵子：歌房さんのお話を聞いて、歌を歌いたくなりました。笠木透さんの「私の子ども達へ」です。皆さんもご存知かもしれませんね。2番の初めの部分を歌ってみます。「生きている魚達が 生きて泳ぎ回る川を あなたに残しておいてやれるだろうか 父さんは 」《拍手》 私は、この歌



が大好きです。父さんの子守歌。子守歌というとほとんど母さんが歌ってきましたが、父さんにも子守歌を歌ってほしいと思っています。私の子ども達は、夫の子守歌でよく寝きました。私が寝かしつけてもなかなか寝ないときに、彼はどこから出てくるのか分からないような不思議な声を出して、あっという間に子どもを寝かしつけてしまう。「彼の特技だな」と思っていました。お父さんだって潜在的には子育てに必要なたくさんの能力を持っていて、普段それを使っていないだけなのです。せっかくの能力も使わないと次第に退化していった活用できなくなります。

歌房さんのお話を聞いて、「そういう入り口もあっていいな」と思いました。お父さんは、「子育ては、お母さんに任せた」と一歩引いて、PTA 活動や子ども会活動に手を出さない人が多いでしょう？ 少子社会ですから、成人するまでに子育てに関わったことがない人も増えています。幼い弟や妹や従兄弟達を抱いたり、おしめを換えた経験がない人も多いと聞きます。女の子ですらそうですから、男の子だとなおさらでしょう。そんな中で、父親も「挨拶だけでいい」と引っ張り出され、それをきっかけに子ども活動に関わり始めた、そこが面白いと思いますね。

歌房さんは、持ち前の好奇心や反骨精神で、挨拶だけに留まらず、何かできることはないかと探しているうちに、自然の中に子ども連れ出すことを思いつき、実際にやり始めました。ご自分が子ども時代に体験していることだから教えやすいし、自信を持って伝えやすい。自然の中に出て行くことによって、お父さん自身も忘れていた能力や感動がよみがえってくる。そうすると、子どものために「してやっている」ではなく、いつしか子どもを飛び越して自ら喜んでやっている。こういう関係の中でこそ、子も育ち、親も育つのでしょうか。「育ててやっている」などというのは、僭越、傲慢。むしろ、一緒になってやっているうちに、どちらも楽しくなって、「育ち合う」のではないかと思います。

司会・松岡信義：2人の意見をお聞きになって、藤田さん、いかがでしょうか。例えば、先程のご発言の中では、昔の家族にいろいろな人達があり、役割もいろいろありましたが、今の子育てというのは、一番よく見るのが夫と妻、要するに夫婦の子育てであるわけです。昔は、そういった事情もまた違ったと思うのですよね。昔の家族の中での子育てと今の状況のそれが、どういった形でヒントになるか。いかがでしょうか。

藤田浩子：先程の映像を見せていただきながら思ったのですが、私達が子どものとき

は「第六感を育てろ」と親によく言われました。第六感というのは、五感を超えた6番目の感覚ですね。まず五感、見る・聞く・嗅ぐ・味わう・触る、その5つに加えて、どう表現してよいか分からないのですが、第六感というものがあったのです。それを、自然の中で私達は育ててきたように思います。それで、「あ、自然の中にいるとそういうことが育つのだな」と、先程の映像を見ていて思いました。

昔、母親は家事が忙しかったし、それぞれ仕事を持っていました。就職していたわけではありませんけれど、農家の嫁は農業をしていましたし、漁師の嫁は漁師の仕事を手伝っていたでしょうし、子育てだけをしていられなかったわけです。おっぱいを飲ませるときだけが母親である、というような忙しさの中で、子どもを育ててきた。ただ、忙しくても、その他の時間は誰かが見てくれていたのです。父親も含めて、おばあちゃん、おじいちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、隣近所の人、そういう人が何となく見てくれていました。ですから、母親だけの責任ではなかったのですね。

よく「3歳までは母の手で」と言いますから、「3歳までは自分で育てます」と言うお母さんもいらっしゃいますけれど、この言葉は、決して母と子のためにできた言葉ではありません。今から一番近いことと言えば、高度成長期に男性を会社に縛り付けておくためには、無償で子育てをして無償で家事をする女性が男性の後ろに必要だったのですね。ですから、そういうことが声高に言われたわけです。また、企業側からすれば、若い女性を安いお金で雇い、それが一旦辞めて、中年になってから、また安いお金で、保障なしで働いてくれる、そういう労働力ができてくるわけですから、企業側にとってもよかったです。その中で生まれてきた「3歳までは母の手で」や「女性には母性本能があるのだ」という言葉に騙されて、男性は子育てに関わることを遠慮していたのではないだろうかと思はれます。

私がやっている「風の子」は、もう20年近くになるのですが、大体生まれたばかりの赤ちゃんから幼稚園に入るくらいまでの親子がいろいろとやっています。そうすると、まず母親に仲間ができますね。その中で、「3歳までは母の手で」と言うかもしれないけれど、その母親自身が密室の中にいて社会と関わっていない、人と関わっていない、そういう状態の中で子育てをしても、子どもに人との関わりを教えられないのだということに気付いてきます。

それと、母親がそうやって友達と仲良く楽しくやっていると、父親がやきもちを焼いて「僕も入れて」と言ってくるのですね。先程、歌房さんは「女性には任せておけない」というようなことをおっしゃいましたが、その逆で、女性が楽しそうにやっていると男性も「入れて」と言ってくるのです。そして「仕方ない、入れてあげようか」という形で、男性も入ってくる。それがまた、とてもよい結果になっていると思っています。

さらに「お年寄りの知恵を借りよう」と言って私のような年寄りを巻き込む。これは、昔の嫁のいろいろな苦勞、お姑さんに仕えることのような、嫁が1人で背負ってきたことを再現するものではありません。自分のお姑さんではありませんから、嫌になったら「さようなら」と言えばよいわけです。私も、自分の嫁にはなかなか言えないようなことを、他人の若いお母さんにははっきりと言えますし、そういう意味でよい関係だと思っただけです。そういうことで、昔は姑から教わったようないろいろな知恵も、他人の年寄りから取り入れていこう。大家族でやっていたように、一緒にご飯を食べたり遊びに行ったりというよ

うなことも友達同士でやろう、と。

そして、お父さんは1人ではなかなか参加できないけれど、集団になると力を出してくれますから、たくさんのお父さんを巻き込むとまた力が出てくる。そういった形で、昔のよさを今に活かすということをしております。

司会・松岡信義：ありがとうございます。昔の知恵を今に活かすという、その活かし方。それぞれ工夫があると思います。先程の歌房さんの吉井川源流の旅では、地域を非常に大事にしていますね。阿波(あば)は新津山市で、本当に山奥で人口も少ないところですが、自然はたくさんある。そこで積極的に活動をされています。

ところが、地域と言った場合、一昔前まではふるさとを意味していました。私自身に置き換えて言いますと、私は島根県隠岐の島出身です。私の父も、その父も隠岐の島で育ちました。地域=ふるさとなのです。ところが、私は津山に来て20数年経ちます。私の子どもは3人いますけれども、津山っ子なわけです。子ども達にとってのふるさとは津山ですね。その子どもが将来結婚したとき、例えば鹿児島や東京で連れ添ったとしたら、その子ども達は鹿児島や東京がふるさとになります。だから地域=ふるさとというのは、今や全く成り立たないわけです。

そういった中で、地域でいろいろつながりを作っていくというとき、どのような工夫が必要か。今、藤田さんからヒントが寄せられたと思いますが、そのことについて、市場さんと歌房さんからもお聞きしたいと思います。お願いします。

市場恵子：「地域」は「向こう三軒両隣」に始まって、戦争中は「五人組」など、個人を束縛・抑圧したりする時代もありました。最近はインターネットや携帯電話などの伝達手段、車などの交通手段が発達したので、個人にとって「地域」の範囲が広がってきました。必ずしも歩いて行ける距離や、日常的に顔をあわせ挨拶を交わす人達でなくとも、情報や目的を共有して、助け合ったり、活動をともしにする人達が住んでいる範囲を「地域」と考えてもよいのではないのでしょうか。

「家族」は、かつて「血縁と婚姻で結ばれ、寝食をともしし、心の絆で結ばれた最小の単位」と定義されていました。それが今や、単身や夫婦のみの家庭が増え、転勤や進学のため、離れて暮らす夫婦や親子も増えました。また、ペットを家族と思う人が増え、ペット霊園ができ、ペットを子ども同然に愛して育てているご夫婦もいます。今まで家族が果たしてきた機能もその多くを社会や福祉、家庭の外に頼る時代になりました。

「家族」や「地域」を、古いイメージの中に閉じこめなくて、自分にとって居心地のいい場所はどこか、自分にとって必要な支援をもらえる機関はどこか、安心して信頼できる相手は誰か、という視点で紡ぎ直す時代になってきたと思います。

まさに藤田さんや歌房さんが実践されているようなことです。藤田さんは「風の子」というグループ、歌房さんは阿波の源流から川を通じて出会っていった人々とのつながり。そんなふうに関わり合いの内発や必要からできていく場や関係性、お互いの安心や喜びでつながっていく「地域」を、多様に創っていったらいいなと思います。

歌房靖夫：私には子どもが2人いるのですが、上の子が高校1年生の女の子です。という

ことは、女の子がこの年代のとき、父親は嫌われるわけですね。お父さん方はそういう経験があると思いますが。そういうとき、私は「私の吸って吐いた空気を、お前が一番よく吸っているのかもしれないぞ」と言います。家族はそうやって、空気ではつながつてるわけです。「汚い」と言う潔癖性の人もしらっしゃいますが、どうしても逃れることはできない。そういう形でつながっているのです。

では、もう一度パワーポイントをご覧ください、もう1つのところでもつながっているという紹介をしたいと思います。今回、源流の碑が成功したのは、親も子どもになって楽しんだという、「大人の自己満足」にしないということがありました。

これは4年生の子ども達と先生ですが、得意満面の子ども達ですね。それで、嬉しかったことというのがここから始まるのですが、子ども達が自然の中で遊び出すのです。

阿波川の源流を探しに行ったときです。子ども達は、お父さんが軽トラックに積んでいた大工鋸を取り出しまして「枝打ち」を始めました。それから、木の上に登り出しました。木の高いところまで登っていったのです。天狗ですね、まさに小天狗。私もびっくりしました。親達は昼の弁当を食べているのですが、子ども達は遊び出しまして。

次は、「源流の碑」の原木を切り出したときのことで。牛若丸を思い出さすと思うのですが。大木の周りに落ちた曲がった枝で、「ちゃんばら」を作り出したのです。私達は、他のことをやっていたのですが、そうやって遊び出したわけです。

それから小さな川があって、魚が泳いでいる。それで、子ども達が思いを書いたのですね。「私たちは、この川が生き物がたくさんいて、植物がたくさん生えているきれいな川であってほしいと思います。だから、みんなの力で大切にしていきたいです」総合学習の成果ですね。それで、看板にその思いを書いています。

「ここには素敵な宝物がある 命はぐくむ流れと緑 ころころのふるさと阿波 ずっといつまでも」という文と、子ども達の宣言を書いた看板を立てました。

そして、子ども達はこれで終わらなかったのです。川をきれいにするのは私達だけではできない、だから村民に呼びかけようとポスターを作りました。阿波に今でも飾っています。それだけでなく、このようなパンフレットまで作っています。9人の子ども達の思いが、ここまで広がったというわけです。それから運動会で、「川の流れ」といって創作ダンスをしました。川の中流や下流や海を表現していました。ここまで広がりました。

もっと広がったのは、大ヶ山で1本の木を切ったのですが、そうしたら1本減りますよね。それで、前の市町村の人が集まって、合併記念ということで大ヶ山の麓に 800 本の木を植えたのです。



このように広がっていったわけですが、結局、「命育む流れと緑、ずっといつまでも」という気持ちが皆さんの中にあっただから、ここまで広がったのだと思います。その思いです。それは隠れているのですが、それを探検、発見したかったのです。これは後から気付いたわけですが、その思いでつながっているのではないかと思います。そういう思い、阿波の人が誇りに思う心、自分を大切に作る心があったということが、私の言いたかったことです。

司会・松岡信義：先程市場さんが、自分の気持ちに発したつながりということを言われましたけど、ちょうど今の、最後の場面で、歌房さんが実践されているということをはっきり示してくださったわけです。

ところで、子どもが自然の中に行ったら生き生きと自ら遊び出すということが、映像として焼き付いているわけですが、子育てというのは、子どもが自分で育っていく力を付けさせ発揮する、そのように子どもをもっていくことと捉えることができると思います。これは最近、人間関係論でよく使われます「エンパワメント」という言葉ですね。エンパワー、つまりパワーを出させるという意味で、平たく言うと、本来持っている内なる力を引き出すということです。これについては、市場さんがいろいろなところでお話をされているようですが、今の映像でも、自然の中で子ども達が遊び出す背景に、大人がいるわけですね。このようなエンパワメント、大人の関わりについて、一言お願いできますか。

市場恵子：1995年に北京で開催された「第4回世界女性会議」で、しばしば「エンパワメント」という英語が使われました。その後、日本に紹介され、片仮名のまま流通しています。日本では「力を付けること」と訳されていますが、語源から言えば、「一人一人が持っている内なる力、潜在的な能力や可能性を回復し、発揮できるように引き出していくこと。または、それを促すような関わり」を意味します。まさに、自然の中に出ていけば自然が人間をエンパワーしてくれるという感じですね。本来、人間は自然の一部であるということを考えると、藤田さんがおっしゃった五感や第六感についても、自然の中で過ごしているうちにバランスよく五感が刺激されて、直感力を発揮できるようになると思います。

また、自然はいつも温かく優しいだけではなくて、冷酷で厳しい部分もあります。我が家も子ども達を自然の中に連れ出してきましたが、ときには危険な場面にも遭遇しました。しかし、そういう厳しい自然の中だからこそできる経験、そこで育まれる勇気や度胸、判断力というものもありました。

歌房さんのお話で思い出したのは、自然の中で子ども達が自ら遊びを考え出していたことです。街では「ゲームやおもちゃがないと遊べない」「テレビがないと退屈」と思っていますが、自然の中に連れ出してやると、最初は「あーあ、何にもない」と言っていた子ども達も、そのうち遊びを作り出して、飽きもせず嬉々として遊ぶというようなことがしばしばありました。自然は人間を「エンパワー」してくれる力を持っています。人間関係の中でもそういう関わりを増やしていけたらいいなと思います。

虐待や、10代の子供達が起こすいじめや非行など、子供達の尊厳や自尊感情を深く傷つけるような事件が相次いでいます。これらは子供達の本来の姿ではないはずで

子ども達の心に寄り添うような信頼関係を取り戻し、「エンパワーメント」を実践していく必要があります。何よりも回復してやりたいのが、自尊感情、自己肯定感、自分を大切に思う気持ちだろうと思うのですね。

実は今日、津山までの道のりを運転しながら、自尊感情について「どんなふうに説明したらいいかなあ」と考えていました。もしも私が、私自身の親友だったらと考えます。私がこの私を親友として見たときに、この私を大好きかどうか。誇りに思えるかどうか。他の人に対して、「私は親友のこういうところが大好き」と言えるかどうか。「私の親友は私」と思えば、心から「大事にしたい」と思えてきます。あまりにも自分にくつつきすぎると無視したり、粗末に扱ってしまいますが、かけがえのない親友がここにいると思ったら、すごく大事にしてやりたいという気持ちになって、思わず涙が出ました。

自尊感情を「心の保温」「心の弾力性」「心の栄養」という言葉で説明してみたいと思います。心が元気で、自分のことを大好きだと思えるときは、心がほかほかと温かいと感じます。逆に、落ち込んだり、自分のことを好きになれないときは、心の温度が冷えています。そんなとき、どうしたらいいか。体を感じる寒さであれば服を着込んだり、暖房をかければ温まります。でも、心はそんなことでは温まらない。皆さんどうしますか。心が冷えたとき、凍りそうなとき、風邪を引きそうなとき。松岡さん、どうしていますか？

司会・松岡信義：好きな本を読んだりしますね。昔1人になったときに読んで落ち着いた本を引っ張り出したり。あるいは、私は自然の中で育ったので、そういったものを求めてさまようとか。そういうふうになりますね。

市場恵子：ありがとうございます。突然マイクを向けてごめんなさい。そうですね。自分の好きなことをする、自然の中へ出てみる、誰かに話を聴いてもらう。大好きな人の側に行って一緒に過ごす。いろいろな方法で温度を保とうとするでしょう。回復しないと大変なことになりますからね。

心には空気が入っていると想像してください。自転車でも自動車でもタイヤに空気が入ってないと乗り心地が悪いです。そんなときには、ポンプで空気を補充します。心も元気がないときは休んだり、おいしいものを食べたり、仲のよい友人と過ごしたりして、弾力を回復させます。そうすると、少しずつ元気が出てきます。

そして、心にも栄養が必要です。栄養が足りなくなると、お腹が空きます。痩せます。病気になるります。心の栄養が足りない状態は本人も周囲も気付きにくいのですが、放っておいたら大変。そんなときは、心の栄養補給、応急手当が必要なのです。

「自尊感情」と堅い言葉で言うより、「心の温度はどうだろう」「心に空気が満ちているかな」「心に栄養は足りているかな」と感じてみる。そういうまなざしで、身近にいる子どもや子育て中の親、学生達に向き合っていきたいのです。

司会・松岡信義：藤田さん、いかがでしょうか。要するにつながりというのは、心につながりということですが、その中で特に、「風の子」の活動をしながら若いお母さん達を結びつけることについて。例えば、歌房さんの実践は、自然の中です。ところが、団地。今、日本の人口の70%以上が都市に住むわけですが、聞くところによると、

団地では「お年寄りが怖い」という若いお母さん達がいるということです。しかし、我々みんな、いずれはそういった老人になっていくわけで、老人の出る場所はたくさんあると思うのですよね。藤田さんがワンクッション置くといったことをどこかでお話しされたと聞いたのですが、その辺り、いかがでしょうか。

藤田浩子：はい。「老人が怖い」という話も後でさせていただきますが、まず先程のエンパワーメントのことで気がついたことを申し上げます。「風の子」で、今の若い方達は「何かしようよ」となかなか言い出しません。「これをしよう」「お友達を作ろう」と言えないわけです。少し前は、公園デビューというのがありましたけれど、それすら「よし、今日は行くぞ」というくらいの意気込みでお友達を作らなくてははいけない。臆病なのですね。でも、間口を広げて「どうぞ、誰でもおいで」と言っていると、入ってきます。入ってくると、今の若い人達はいろいろな能力を持っていて、コンピュータでお便りを作ってくるし、会計の上手な人もいるし、車の運転が上手な人もいるし。若い人達がたくさん能力を持っているのに、今までそれを出さないでいた。それが1つのグループになって、これが必要、あれが必要と言っていると、結構出してくるのですね。そして、そういう力を出してくるお母さんの子どもが、また力を出してくるわけです。だから親が自分の持っている力を出せるよう、市場さんがおっしゃった自尊心、「自分ってこんなこともできるし、あんなこともできるし、素敵な自分だわ」と思えるようになると、親の成長にも子どもの成長にもつながると思っています。



私の好きな詩を1つ紹介します。「私、私が好き。なぜなら、だし、だし。だから、私、私が好き」という詩です。アメリカで聞いてきた詩なので、作者を知らないのですが、例えば、私だったら「私、私が好き。なぜなら、こんなに背は大きいし、人前でしゃべれる図々しさも持っているし。だから、私、私が好き」と作る。若いお母さん達にもそれを言ってもらいます。それから、「私、ちゃんが好き」と子どものことをそこに入れて言ってもらう。幼稚園でお母さんの集まりがあると、私は大抵一番先にそうやって言ってもらうのですが、半分以上のお母さんが「え！うちの子、困ったことならいくらでもすぐ出てくるけど、いいところを2つ言うの？」と、ずっと考えるのですね。その次に、旦那さんの名前を入れて言ってもらおうとすると、もっと困る。「えー」と言って、考えに考えた上で、「お金稼いでくるし...」とか。「そういうつながりじゃなくて、もうちょっと何かいいこと言えないの？」というくらい困る。でも、そういうことを言い始めると、言っているうちに「あ、私ってこんないいところがあるじゃない。背が大きいのは、本当は好きじゃなかったけど、背が大きいってこともいいことじゃない」と思えてくるのですね。それが、若いお母さん達の1つのグループの中で何かの力を必要とされてくると、自分のいいところも分かってくる。子どもにも、「私達の家族のところにあなたが来てくれて嬉しい、私達の子であってくれてよかった」と言うと、子どもはとても喜んでくれると思います。そういうことを、まず思いました。

そして、老人の話について。今、若いお母さんの中に「年寄り大嫌い」と言う人がたくさんいます。なぜかという、「風の子」でも大半はマンション住まいなのですが、上や

下の階に年寄りがあると、家の中でバタバタしてはいけない。子ども達に「静かにしなさい」と言い続けて、それだけで気が滅入ってしまうからです。中には、騒ぐと下の階からドンドンと長い棒か何かで突いてくる年寄りもいるらしい。でもそれは、私も含めて、今は周りに子どもがいないためなのですね。昔は10人も産んでいれば、必ずどこかに子どもがいた。いつもうるさい子どもの声を聞いていれば、「世の中はこういうものだ」と思って過ごせます。今は自分の子どもを2人くらい育てて、後は静かな暮らしをしている。そこに突然、自分の孫でもない子どもが騒いでいたら、うるさく感じるわけです。私が勤めている幼稚園は東京都ですが、園の庭で騒いでいるだけで電話がきます。「これ以上騒がせるな」「2時までは我慢していたけど、2時を過ぎててもどうしてまだ騒いでいるんだ」という電話がかかってくる。それから公園でも、公園の近くの人から市役所の公園課に電話があるそうです。そういう世の中になっているわけです。でも子育てサークルの中に年寄りを引き込むと、結構喜んでいろいろやってくれるのです。だから、みんなそれぞれ力を持っているのに、その力を出しきれない、嫁と姑の関係や親と娘の関係だと、どこかに遠慮があったり、逆に言い過ぎたりします。そこに他人が、他人の関係ではあるけれども、つながりを持っていくと、お互いにエンパワーメントということができるのではないかと思います。

司会・松岡信義：ありがとうございました。今のことに関わるのですが、市場さんが別のところで、「いい子・いい親幻想からの脱却」ということを言われていますよね。要するに、親の数だけ育て方があり、子どもの数だけ育ち方があるといった意味で、「いい子・いい親幻想からの脱却」ということだと思います。少し意地悪な質問になるかもしれませんが、「いい子・いい親幻想から脱却することが大事。親の数だけ育て方があり、子どもの数だけ育て方があるんだよ」と言った場合に、このような発想、考え方が、いわゆる非常識な親、わがままな子どもの出現を助長することはないのでしょうか。最近、皆さんも耳にされるとと思います。モンスター・ペアレント、言いがかりをつける保護者達。学校でも先生方が困っていて、学習活動を阻害されている、東京辺りでは弁護士をつけている、そういった対策をとらなくてはならない。これは大事なことだと思います。いかがでしょうか。

市場恵子：私がカウンセリングで出会う親達は、真面目に悩んでいる人ばかりなので、「肩の力を抜いていいよ、それぞれでいいんだよ、あなたはよくやっているよ」と肯定的な言葉かけをして、自信を回復できるようにサポートしています。しかし、子育て講演やPTA研修には参加しないで、文句だけ言うような親がいることも、先生達から聞いて知っています。人間関係にはバランス感覚が必要だと思うんですね。勝ち負けではなく、引き分けるバランス感覚。たくさんの人の中で生きていくと、お互いの主張が衝突することがあります。自分は正しいと思っていても、相手と価値観が違えば、どこまで言ったらいいのか、どこで引いたらいいのかという判断が必要です。そんなときに大事なものは、自分の欲求や感情や価値観を、誰か親しい人に聴いてもらうことではないのでしょうか。少なくとも1人か2人の信頼できる友人に、「私の感じていること、考えていることはおかしくない？ 私が望んでいることは、わがまま？」と問うてみて、友人達が「大丈夫、あなた

は正当なことを感じているよ」と言ってくれたら、「ありがとう。あきらめないで頑張ってみる」ということになりますよね。文句を言ってこられる人は、孤立している人ではないでしょうか。周りに信頼できる友達がいればやりとりができれば、もっとバランスのとれた主張ができるでしょう。

価値観がぶつかったときには、お互いに思っているところ、感じているところをじっくり聴き合って、問題解決の糸口を見つけていかなければ、前に歩み出すことができません。攻撃的な人に対しては、ペコペコ、オロオロしないで、毅然と「ノー」を言ってもいいし、こちらの事情を理解していただくためには押し返していく必要もあります。校内でもネットワークを組み、教育委員会や専門家とも相談しながら、傲慢にも卑屈にもならず、柔軟に対応して行ってほしいと思います。

親と子の関係でも同様です。子どもの言いなりになるのは「放任」です。先ほどの攻撃的な親と同じで、「無理が通れば道理引っ込む」です。しかし、子どもの気持ちを聴いてやった上で、提案したり譲歩したりしてみる。子どもの健全な育ちのためにどうしても譲れない部分では一步も引かない。分かるように言って聞かせる。どちらが勝つか負けるかではなく、引き分けることが大事なんですね。お互いの言い分を聞き、譲歩したり、交渉したり、提案して、納得する部分を見つけていく。そのやりとりのリーダーシップをとるのは、大人である親や教師の役割です。暴力を使わない平和なコミュニケーションの模範を見せてやってほしいと思います。

司会・松岡信義：ありがとうございました。では、ここからは会場の皆さんからの意見を交えてやりたいと思います。今日は、NPOで活動されている方や、現役の幼稚園の先生方、それから未来の教師もたくさんいらっしゃるようです。今、3名の方の発言をお聞きになって、率直な意見や感想、いろいろな悩みなど、何でも言っていただければと思います。はい、どうぞ。



質問者：藤田先生と市場先生にお聞きします。今、文部科学省などで教育の在り方について、教育基本法などいろいろ見直されています。それで、家庭の教育力が非常に落ちてきている、ややもすると、全てが家庭に責任があるというような言い方をされてしまうことがあるのですが、そのことについてご意見を伺いたいと思います。

藤田浩子：私も家庭の力を付けたいと思っておりますけれど、つい何か月か前に「親学」というのを文部科学省で出しまして、「母乳を飲ませながらテレビ見るな」とか、ああしろこうしろというのが出ました。私も、ほぼ似たようなことを若い人にしております。でも、私が言うのと国が言うのとでは全く違います。私が言っても何も権限がありません。今日聞いてくださった方に、「私は藤田さんの意見に賛成する」と言う人も何人かいるかもしれませんが、「全然賛成しない、私はそんな実践はしない」と言う人がいてもいいのです。ですが、国は権力を持っていますから、同じことを言っても、上から下へ、またその下へという流れができて、そのうち罰則ができたり、強制が出てきたりということになると思います。また、私は大体お母さんと子どものことを思って言いますが、国の目的は、

日本の国のためにより家庭を、国の役に立つ家庭を作るにはどうするかというところから発想していると思います。家庭が大事ということはそれぞれの人が思えばいいことで、国は思わなくてもいいと私は思っております。国が思うのなら、もっと公園を作ったり、幼稚園の先生の給料を上げたり、身分保障したり、子持ちで働く人の勤務時間を減らしたり、そういうことをきちんとしていただきたいと思いますね。

市場恵子：おっしゃる通りだと思います。子どもが育つ最初の集団は家族・家庭です。子どもが安心して過ごせる場、身近な大人が子どもの持っている力を引き出してやれるような家庭であってほしいと私も願っています。そのためには、大人の自尊感情、生きる力こそ育てていきたいものです。それは上から押し付けられて育つものではありません。「親が1センチ変われば、子どもは1メートル変わる」といいます。親の自尊感情が高まり、子どもへのまなざしが優しくなれば、子どもの変わる可能性が広がります。

内閣府の調査では、3人に1人の妻がドメスティック・バイオレンス(DV)、配偶者から暴力を受けたことがあると答えています。表向きは仲のよさそうな家族、経済的に恵まれた家庭に見えても、中では暴力が頻繁に起きているのです。DV環境で育つ子どもは心理的にも深刻なダメージを受けます。あるDV被害者が、「夫と別れて子どもを守りたい」と家から出て、母子だけの暮らしを始めました。初めは、「1人でやっていけるだろうか」「経済的にも苦しい」など、不安は尽きませんでした。しかし、母親が暴力から解放され、安心して生活できるようになると、子どもの表情も少しずつ変わってきました。夫と別れることをためらっていた彼女も、子ども達が安心した表情になっていくのを見て、「子どもには父親も必要と思って耐えてきたが、暴力を振るう父親は子どもにとっても最悪ということに気付いた」と言われました。夫婦仲良く暮らすことは大事です。しかし、一方が我慢を強いられ、見せ掛けの平和を保とうとしても、関係はいつか破綻するでしょう。家族の中で一人一人が大事にされ、暴力のない対等な関係を築いていけるようにと思います。国が上から押しつける家族のイメージは、伝統的な性役割分業観や家父長制を復活させ、子どもを大人の支配と管理の下に閉じ込めていくような気配を感じます。「おかしいことはおかしい」と敏感に反応し、お上の言うなりにならないような自立的なネットワーク、つながりを創っていききたいものです。

司会・松岡信義：ありがとうございました。はい、どんどんお願いします。

質問者：今日はいろいろな話が聞けてよかったです。美咲町から来ました。自然がたくさんあるところです。でも、子どもは自然の中での発見や探険がなかなかできない状態です。子育ても頑張っているのですが、やはり個々に頑張る形で、地域でつながるということをどういうふうにすればいいのかと思います。保護者会活動もさせてもらいましたが、それぞれに皆さん忙しそうだし、地域の子ども会も行事のときに集まるだけです。ここでずっと一緒に子ども達を育てていく仲間作りということが、大人の忙しさに追われてできていないのではないかと私は思います。ですから、阿波(あば)の吉井川の源流を訪ねてというような活動は、とても1人2人のお母さん達がするだけではできません。田舎だから住む人も少ないけれども、都会と同じように子どもは育っているし、いろいろな人間関係の

力も付けていきたいと思います。今日は地域の NPO ということで、とても関心があって来たので、どういうふうにしたらその力が出せるのかということ伺いたいです。

司会・松岡信義：歌房さん、いかがですか。

歌房靖夫：はい、いい質問です。そこで私も悩みました。しかし、よく考えてみると、今の社会というのは自分の心を映した鏡であると思うのです。だから、モンスター・ペアレントとかありましたけど、結局みんなそうだと思うのです。自信をなくしている、生きていく自信がない。私も偉い親ではありませんでした。それで、あるとき、会社を休みました。会社でも嫌なことがありますので、休んで本屋に行っていたのです。そうしたら、妻が会社に電話をされてしまいまして、私はそのときに弱音を吐きました。この弱音を吐けた、ということ。それは、やはり自分が自然の中でその自然体験をしていて、自然の一部だということがあるからです。



実は、私は 18 ~ 20 歳まで引きこもりでした。そのときに、自殺を考えるわけです。自分はいなくてもいいのではないかと、いなくても世の中回っていくだろうと思うのです。ですが、そのときに思い出したことがありました。子どものときに、学校の遠足で大ヶ山に連れて行かれて、ススキの中でかくれんぼや鬼ごっこをしたことです。それから小学校 6 年のとき、黒岩というところでキャンプをした記憶。当時は「なんでそんなところへ行って、そんなしんどいことをしなきゃいけないんだ」と思うような子どもでしたけど、引きこもりになったときに、なぜかそこへ行ってみたくなったのです。子どもの頃見たススキのところに行ってみたくなった。それで行ったときに、私は自然の中の一部なのだということに気付いたのです。そこからは瀬戸内海も山陰も見えるので、「あっ、こんな小さなところで私は悩んでいたんだ」ということが分かりまして、それで立ち直ったという経過があるわけです。弱音を吐く、そういう弱音があるということが分かっていると自信ができます。

それから、これは娘が 1 ~ 2 歳のときの話です。私は、結婚したのは教会でした。その教会の写真をベッドに置いています。私が「これ、どこか知ってる？」と言ったら、娘は「知ってる。パパとママが結婚したとこでしょ！」と言うのです。妻がその教会を教えたのだらうと思っていたら、妻も教えていない。不思議に思って聞いたら、「雲の上から見てたの」と言いました。今、娘はそのことを全然覚えていませんけれど、「あ、この子は駄目な人間のところに生まれてきたんだ。自分で選んで。私は駄目な親だけれども、そこへ生まれてきたんだ」と分かったわけです。親はいろいろしなければいけないと言いますが、「お前が選んで生まれてきたんだから、少しは我慢しろ」というような余裕ができてきた、という経過もあります。余裕も含め、自然の中で生きているということですね。

それで、もう一つ。こういうことを言っているのでも、よく言われるのですが、私を「1 万人に 1 人の逸材だ」と言う人がいらっしやいます。いい気分ですよ、1 万人に 1 人の逸材だと言われたら。でもよく考えてみたら、皆さん一人一人が 1 万人に 1 人の逸材なのです。そのところが分かってくると、すごく自信が持てます。親としても、人間として

も。そこからは、少々の失敗は大丈夫。

自信が大事ということです。分かりますか？ 自然の中で生きてると、つながり感というのがあります。皆さんとも今日つながっているわけですが、それは口で説明しても伝わらない、とてつもない喜びなのです。そこから自己肯定、あるいは自己発見ができる。そうしたら、内発的に「よし、やろう」という気になるわけです。自分の心から、「自らに由る」というもの、これを「自由」と私は思うのですが、「自らに由る」というものが出てくる。そういう「ほっとけん」というような気分、ワクワク感というものを皆さんが感じられたら、きっと動くと思うのです。自分が、自分から。自分がワクワク感を感じていれば子ども達も共鳴します。そこがポイントではないかと思います。

司会・松岡信義：いかがでしょうか。「そういったことであれば私もこんなことやってた」とか。学生さんも、たくさん子ども達と接するとき、自分もワクワクしたときの子ども達の顔は違ってくると思いますよね。いかがでしょうか。はい、どうぞ。

質問者：地域活動のことでお聞きしたいのですが、子育てサークルを作るときには、「この人とやってみたいな」と思って作られるのでしょうか。というのが、子育て支援センターのようなものが私達の地域にあるのです。そのセンターから声がかかって、「託児しないといけない」と言われたらそれはしたくないけれども、一人ぼっちのお母さん達と一緒に何か「ちょっと寄り合ってみませんか」というような活動はしたいと思ったときに、その地域や行政の援助というしがらみと、自発的にやろうと思っていることが、上手くかみ合わないようなことがあると思います。こういう場合については、どのようにお考えでしょうか。

司会・松岡信義：これについて一言差し挟ませてください。実は3名の方に、最初の発題でおっしゃる内容をあらかじめ伺っていたのですが、話される予定であったのに言われていないことがありまして…。例えば藤田さんが、「お役所主導の子育て支援がなされています。その効果も認めますが…」と言われました。お役所主導の子育て支援で気になる点、あるいは改善してもらいたいという点を、藤田さんの方からお願いしたいと思います。それから、市場さんは岡山県の総社市について、いろいろな取り組みが上手くいっているということをおっしゃっていたのです。そこで「官民のパートナーシップ」という言葉が使われていたのですが、その官民のパートナーシップで大事な点は何かを、今のご質問に答える形をお願いします。

藤田浩子：まず、こちらのように組織するというのは難しいのですけれども、私はグループは2人でも3人でもグループとっておりますので、やりたいと思った人がやりたいように2人でも3人でも始めることが大事ではないかと思います。お役所のやり方を立てるか、自分達でやりたいことをするかで悩んでいらっしゃるようですが、私の住んでる千葉県の役所のやり方は、あまりにも過保護です。若いお母さん達に「お母さん達、おしゃべりしていいよ。私達が子守りしてあげるからね」とか。若い保育士さんが一生懸命紙芝居を読んでいる、あるいは子どもと遊んでいるのに、お母さん達は後ろで携帯をさわった

りおしゃべりしたりして、それを注意できないとか。あまりにも若いお母さんをお客様にし過ぎている。そして、そういう若いお母さんにサービスしているのが子育て支援だと思っている。私の知っている限りでは、お役所主導の子育て支援は、お母さん同士を育てようというよりは、お母さんを支援するという名前で甘やかしているように見えます。お好きなようにどうぞと寄り添っているふうでいながら、「お母さんが学ぶ」「お母さんが自分達の力を出す」場所に作り上げられない。そのことがとても気になっています。他の地域のことはよく知りませんが、その官と民が一緒になるためには、私は民の方がかなり力を持っていないとお役所にリードされてしまう気がしていますので、自信を持って民の方で力を付けてください。

市場恵子：やりたいことがあれば、「この指とまれ」と呼びかけてみてはいかがでしょう。私は 20 代後半から数年間、地域にテニス部を作って、子育て中の母親仲間と定期的に体を動かし、汗を流していました。30 代後半には、4 人の女友達と一緒に、映画の上映会やコンサート、講演会などを企画したり、「ウイメンズセンター岡山」を作りました。女性が心や体や性のことで悩んだり傷ついたりしたとき、どこへ相談に行こうかと悩みますよね。産婦人科医や弁護士、警察や裁判所などは敷居が高い。女性達が安心して相談できるようにと、民間の小さな拠点を設立したのです。友人の自宅の一室に電話を引き、パンフレットを作って会員を募るところから出発しました。5 人いれば、心強い。藤田さんがおっしゃったように、初めは 2 ~ 3 人からでもいいと思います。完璧でなくていいから、やりたいことから始める。歌房さんのおっしゃった「ワクワク感」「自発性」が大事です。やりたいことでまとまるから元気も出る、やる気も出る。楽しく続けているうちに、振り返ってみたら 10 年くらいやってきた、ということになるのでは？



12 年前から CAP 活動にも関わってきました。Child Assault Prevention。1978 年にアメリカで開発され、1995 年から日本にも導入された「子どもへの暴力防止」プログラムです。「安心・自信・自由」という分かりやすい人権概念をもとに、いじめ・痴漢・誘拐・虐待・性暴力などの暴力に対して何ができるかを、寸劇などを用いて具体的に考え、練習し、身に付けておくプログラムです。子どもだけでなく、保護者や教職員、地域の大人にも伝えています。現在、全国にある約 160 グループを、「NPO 法人 CAP センター・JAPAN」（西宮市）がネットワークしています。岡山では 1996 年にグループを結成しました。初めは 1 人で「素晴らしいプログラムがある」と触れ回っていましたが、仲のいい友達が「やりたい」と賛同し、3 人、4 人と集まってきました。今では 40 人のメンバーがいます。津山の CAP グループも 3 人からの出発でしたが、今は 10 人になりましたね。

都会でなければできないとあきらめるのではなく、これからは地方の時代です。歌房さんの場合も、彼が「やろう」と思って動き出したら、仲間が集まって素晴らしい取り組みになった。「田舎」であることを逆手にとって、知恵を集め、仲間を集めて、できるところから始める。活動が続いていけば、それなりの成果が形になって現れます。それを行政が認めて活動をバックアップする。そういう流れを作っていくことが大切です。

総社市の子育て支援活動では、民間の力があちこちで発揮され、ネットワークが生まれ、

行政が前になり、後ろになって、活動を応援しています。経済的にも助成し、会議を開く場所や情報を提供し、ネットワークの手助けもしている。民間と行政がお互いのよさを活かし合い、対等なパートナーシップで動いているから、元気がいいのでしょう。町の規模がほどほどで大き過ぎないということも、利点だと思います。

司会・松岡信義：ありがとうございました。他にありますか。

質問者：今日は神奈川から来ました。聞きたくて聞きたくてやって来たのですが、興味深い話がたくさん聞けて、いいアイデアも湧いてきて、参考になってよかったです。私は不登校の子の家庭訪問での美術講師という形で指導をさせていただいています。今、1つ考えていたことがあるのですが、ある子が父子家庭になってしまっていて、もうちょっと何か関係性が広がれば良いなとずっと思っていました。その後、別のところで今度は母子家庭の子と関わりができました。それから、友人が NPO 何かでフリースクールとか、そういうところとの関係も持っていて、そういうバラバラの地域にいる子供達をつなぐことができたなら面白いことができるのではないかと、思いました。近いところのフリースクールに頑張っている子が、全然違う地域の子とつながりができたら、関係性や世界が急に広がる可能性もあるのではないかと、お話を聞きながらそういうことを考えまして、何か参考になる話が聞けたら嬉しいのですが。

市場恵子：シングル・ペアレントのネットワークは必要だと思います。日本の1人親家庭に対する福祉は、母子家庭に厚く（十分ではないのですが）、父子家庭には薄い。母子・父子ともに、1人親家庭にはバックアップが必要にも関わらず、お父さんは働いていて経済力があるからと放置されてきたわけですね。でも、父子家庭も支援を必要としています。家族と聞けば「お父さんとお母さんがいて…」と両親のそろっている家庭を想像する人が多いのですが、今は母子家庭も父子家庭も増えています。

母子家庭の親達は、「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」というネットワークを作っています。女性達は、子どもを通じてつながり、悩みを語り合ってお互いをエンパワーしているようです。しかし、男性達は女性のようにつながりにくい。弱音を吐けないので、辛くても1人で抱え込み、悩みを打ち明けられないのです。外からいるんな人が関わって、お父さんを誘い出し、仲間や支援者につないでいく必要がありますね。「男らしさ」の神話に傷ついている人もいますので、心理的なサポートも必要です。

もう1つのご質問に関して。例えば、同じ地名の町が集まってサミットを開くように、何か共通のテーマで「交流しませんか？」という企画もいいと思います。地域やグループを越えた交流の中で、新しいアイデアが生まれたり、元気をもらったりできるからです。歌房さんのように、川をテーマにつなぎ合って、今まで出会ったことのない人達と出会っていくのは大きな喜びですよ。沖縄の読谷村では、元村長の山内徳信さんが提案して、毎年北海道の若者と沖縄の若者を交流させていました。南と北の子ども達が相互に行き来し、風土・文化・歴史・言葉・食べ物など、お互いの違いを学び合っていくうちに、次第に子ども達が自分の「地域」を誇りに思うようになっていったそうです。

藤田浩子：1つのテーマで地域を越えてつながることも本当に大事だと思います。ただ、私達の「風の子」で言えば、父子家庭の子どもさんも母子家庭の子どもさんも一緒に参加していると、両親そろっているのが当たり前と思っていた人達が「えっ」と思うことがある。また、障害があるお子さん、障害があるお母さんの子どもさんなど、いろいろなタイプの方がいらっしやると、そういう方と付き合っ初めて気付くことがたくさんあるのですね。ですから、初めはその自分のつながりで、1つのテーマでいいのですが、できればいろいろな他のところに出て行くことも、もっといろいろなことを知る1つの場になるかと思っています。



市場恵子：最近、お父さんの子育てをほのぼのと描いた絵本が増えてきたと喜んでいますが。今日ご紹介したいのは、エリック・カールの最新作『とうさんはタツノオトシゴ』（偕成社）です。海の中には、タツノオトシゴを始め、オスが子育てをしている魚がたくさん住んでいます。鳥の世界にも蓮鶴（れんかく）のようにオスが子育てをしているものがあります。藤田さんがおっしゃったように、家族や子育てにはいろんな形があるし、あっていいんだと、視野を広げていくことが大切ですね。

司会・松岡信義：時間が押し迫って参りましたが、ぜひこれは言っておきたいということはいかがでしょうか。はい、どうぞ。

質問者：未来の保育士の卵、幼稚園教員の卵として質問させてください。保育士や幼稚園教諭として NPO 法人とどう関わっていくか、アドバイスがあれば教えてください。よろしくをお願いします。

司会・松岡信義：では、これを最後の質問にさせていただきます。「最後に3人の方に一言ずつ」と最初に言いましたが、実はとてもそんな時間がありません。今の質問に関わる形で、それも含めて一言ずついただくという形で、お願いいたします。では、歌房さんから。

歌房靖夫：NPO 法人もいろいろありますし、いろいろな人がいます。私は、この間皿回しを習ったのですが、最初はできないわけですね。それでコツを教えてもらいました。最初は、皿を回そうとしていましたが、回そうとしたら回らないのですよ。だから、皿に合わせる。これは子育てでもそうです。子どもに合わせる。「自分が自分」で動いているのですけれども、そういう合わせることも大事なのではないかと、それがコツではないかと思っています。それから、私はよく妻と子どもに「お父さんは分かってない」と言われます。結局、忙しくて関われないのですけれど、そのせいでその人を認めるということができていなかった。相手に合わせるということもできていなかったのだという批判だと思います。その辺りのこと、違う意見を認めるということができたら、きっと上手くいくのではないかと思います。

藤田浩子：では、私からも一言。幼稚園の先生や学校の先生は、その職場の中だけでも精一杯。でもそこをちょっと広げて、別に1つグループを持つ。絵本を読み合う会、何か話し合う会、そういうグループに出て行こうという気持ちがあること、自分の職場だけで満足せずに外の空気も吸いに行こうとする、その辺りが大事ではないかと思います。

市場恵子：89歳で他界した祖母は、ひ孫達の成長を喜び、いつも私に「よくここまで育てたね」と言ってくれていました。亡くなった今も、祖母の声が聞こえてきます。皆さまには子育て中の親達に寄り添って、「よくやってるね」と労ってあげることのできるご自分を育ててほしいと思います。自分自身に対して「よくやってるね」と労っていれば、他人にも「よくやってるね」と労ってあげられます。さらに、周りの友達や先輩達から「よくやってるね」と労ってもらえれば、またその言葉を誰かと分かち合っていけます。お互いにいいところを褒め合い、労い合って、ともに生きていきましょう。

親は血縁の親だけではありません。里親や養親(ようしん)もいるし、祖父母が親代わりになってくれることもある。また、日本には「道親(みちおや)」という素敵な言葉があります。子どもに関わる私達一人一人が、誰かの「道親」になれるのではないかと考えています。

司会・松岡信義：ありがとうございました。急がせて申し訳ありませんでした。今日は黙っている時間がないくらいの密度でやってきたわけですが、もちろん最後にまとめるようなことは初めから考えていませんし、まとめきれぬわけでもありません。パネリストの方にも最後に質問へのお答えを織り込んでという形で、とても無理な形で一言をいただきましたが、むしろその方が、あえて最後まとめた形で提言をお願いするよりもよかったかと思っております。内容が内容ですので、論点はたくさんありましたし、豊かな心、言葉がたくさんありました。今日参加いただいた方々にも、それぞれ考えておられることがあるかと思えます。時間の関係でこの場ではできませんけれども、また別の機会に問いかけてみたり、別の場所でそれを試みてみたり、それぞれに課題を引き取って帰っていただけたら、フォーラムとしてのねらいは達成できたのではないかと考えております。では、ここで進行の方にバトンを渡しますので、よろしく願いいたします。

進行・松村納央子：皆様のご協力で、和やかながら密度の濃いフォーラムとなりました。今一度、前にいらっしゃる4名の皆様に拍手をお願いしたいと思います。《拍手》以上をもちまして、午前の部を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

